ウエストナイルウイルスの侵入に備えて

渡り鳥の飛来地

ウエストナイルウイルスは、日本脳炎ウイルスと極めて近い関係にあるウイルスで、アフリカ、ヨーロッパ、中東、西アジアで見つかっています。1999年には米国でも初めて患者が発生し、その後米国全土に広がり毎年猛威を振るっています。

このウイルスは蚊が媒介し、自然界では鳥と蚊の感染サイクルで維持されています。ヒトは感染蚊に吸血されることによって感染します（鳥→蚊→ヒト）。感染したヒトのうち、多くの場合は症状がでないまま治ると考えられていますが、およそ２割は発症し、2～14日の潜伏期のあと、発熱、頭痛、筋肉痛、発疹などの症状を示します。また発症者の一部は、重症化して脳炎になり死亡することもあります。

現在のところ、わが国へのウエストナイルウイルスの侵入はまだないと考えられています。侵入経路としては、蚊が飛行機や船で運ばれたり、ウイルスを持った鳥が飛来または輸入されたりして侵入するケースが考えられており、いつ侵入してもおかしくない状況です。港や空港周辺では検疫所が定期的に蚊の調査を行っていますが、飛来する渡り鳥の調査は行われていません。そこで当研究所では、昨年4月から毎週1回、渡り鳥が飛来する場所で蚊を採集しウイルスを保有していないか監視しています。現在のところウエストナイルウイルスは検出されていませんが、今後も侵入に備え監視を継続していきます。

【微生物室・衛生動物室】

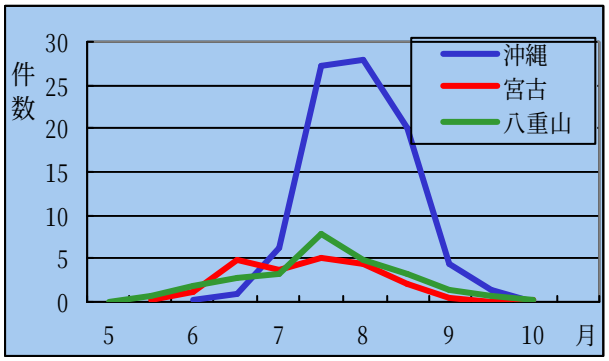
蚊の捕集器

ハブクラゲ発生注意報発令中

1998年から2004年の7年間に、沖縄県に報告のあった海洋危険生物による被害は年平均327件で、そのうち、被害の60%近くはハブクラゲによるものと考えられます。このため、沖縄県ではハブクラゲによる被害が集中する6月～9月にハブクラゲ注意報を発令しています。被害発生期間は地域によって少し異なります（図）。

ハブクラゲによる被害の86%は遊泳時におきています。被害防止のため、クラゲ侵入防止ネットの中で泳ぎましょう。ただし、ときおりネットの中にハブクラゲが入り込むことがあるので、Tシャツなどを着用し、できるだけ肌の露出を少なくすると安全性が高まります。

クラゲ進入防止ネット(残波ビーチ)



ハブクラゲ被害件数(1998～2004年の平均)

ハブクラゲに刺された時の応急処置は次のとおりです。

①すぐに海からあがる、
②刺された場所を絶対にこすらない、
③食酢（酸度5%程度）をたっぷりかける、
④クラゲの触手をそっと取り除く、
⑤痛いときは氷や冷水で冷やす。

【衛生動物室】